社会課題を解決するための コミュニケーション能力の開発

Developing Communicative Competencies for Social Problem Solving

研究代表者 山崎吾郎(COデザインセンター准教授)

研究協力者

[学内] 伊藤 武志(SSI教授) 今井貴代子(SSI特任助教) 八木絵香(COデザインセンター教授) 上須道徳(COデザインセンター特任准教授) 辻田俊哉(COデザインセンター招へい教員) 工藤充(COデザインセンター特任講師) 大谷洋介(COデザインセンター特任講師) 小川歩人(国際共創大学院学位プログラム推進機構特任助教) 戸谷洋志(国際共創大学院学位プログラム推進機構特任助教) 渕上ゆかり(工学研究科附属フューチャーイノベーションセンター特任助教) 石塚裕子(人間科学研究科付属未来共創センター特任講師) [学外] 永田宏和(デザイン・クリエイティブセンター神戸副センター長) 菅野拓(京都経済短期大学経営情報学科講師)

1. プロジェクト概要

このプロジェクトでは、社会課題を解決に導くために必要となるコミュニケーション能力の開発を目的として、PBL形式のプロジェクトを活用した実践的な教育手法の開発、および人材育成を行っています。PBLとよばれる手法には、主としてプロジェクト型(PjBL: project-based-learning)と課題型(PBL: problembased-learning)があります。このプロジェクトでは、取り組む課題の複雑さや規模に応じて段階的なカリキュラムを準備することで、基礎から応用、実践まで、レベル別に教育実践の場を創出することを目指しています。さらに、発展的な学際共創プロジェクト(transdisciplinary research project)へとつなげていくことで、教育・研究・実践のあり方に有機的な連環を作り出していきたいと考えています。

カリキュラムの設計とPBL/PjBLの実施を基本的な活動とし、定期的に行う研究会でその成果や課題を検討し、今後の活動をさらに充実したものにするとい

2. 2020年の取り組みと成果

2年目となる2020年度は、主に「知識の翻訳」をテ ーマとしてプロジェクト型授業の設計を行い、その結 果を研究会で検討しました。課題解決のプロジェクト には、それぞれの課題に固有の知識、関連するステー クホルダーが個々に有する知識、そして課題に取り組 む学生たちが学ぶ専門分野の知識といった、さまざま なモードの知識が混在しています。そしてそれゆえ、 問題の定義や用いられる基礎資料の解釈といった基本 的な作業においてさえ、翻訳の失敗からさらなる課題 が生み出されてしまうことがあります。また、いくら 学生が調査をして立派な解決策を提案しても、それが 実践の場において理解され根付いていかなければ、プ ロジェクトは実を結んだことにはなりません。至ると ころにあるこうした知識のモードのギャップに意識的 になり、適切に相互の距離を縮め、よりよい協働の場 を作り出すための力を身につけることは、共創による 課題解決の基本といえます。



大阪市住之江区役所にて「空き家」に関するプロジェクトを行っている様子

PBLを活用した実践的な教育手法の開発と人材育成

一例をあげると、10月に実施 した「都市における空き家対策 のための広報戦術」を考えるプ ロジェクトでは、そうしたコミ ュニケーションの問題を正面か ら扱いました。住之江区役所に 協力いただいたこのプロジェク トでは、そもそも「空き家」と 呼ばれる対象に行政的なカテゴ リーがあり、またそれが「空き 家」の所有者の認識としばしば 一致していないことが問題とな っていました。また、都市にお いて空き家が生み出されるプロ セスは、地方で人口の流出を直 接的な原因として発生している 空き家の問題とはその性質が異



プロジェクト型科目について学生と議論する様子。オンラインと対面の併用で議論をすることが増えた

なっており、地域によって異なった問題の現れ方をします。こうした個別具体的な課題に対応するには、「空き家問題」といった一般的な問題設定ではなく、たとえば「空き家」に関わるステークホルダー間の協力体制や、空き家に関わる情報を適切に伝える手段を構築することが重要になります。プロジェクトに取り組むなかで、「空き家」という課題の認識の仕方それ自体が、実はメッセージの発信という別の実践を暗黙のうちに規定していることが明らかになりました。

このほかにも、知識の翻訳に焦点をあてた、大小20のプロジェクト型科目が、2020年度に実施されました。その成果は、研究会での検討を通じてさらなる手法の改善につなげていくことになります。

3. プロジェクトの今後

2020年度は、連携組織であるデザイン・クリエイティブセンター神戸(KIITO)との本格的な協力関係をはじめることができました。KIITO内に新たに設置される予定のスペースは、今後、大学と社会との連携を実現するプラットフォームとなることが期待されます。次年度は、「知識の翻訳」に加えて「対話・調整」に焦点をあてたプロジェクトを設計し、社会課題解決のためのコミュニケーション能力の開発をさらに深め



KIITO訪問の様子

ていく予定です。今後KIITOと一緒に実施する予定の地域共創に関わるプロジェクトは、そうした取り組みの一つとなるでしょう。

COVID-19は、次年度も引き続き、日常生活はもちろんのこと、教育や研究の場面にも大きな影響を与えることが予想されます。現況のパンデミックそれ自体が、新しい社会課題や新しい仕組みを生み出すことに根本的に関わっている以上、本プロジェクトでも、こうした危機的状況において正面から教育・研究・実践のあり方を問い直す作業に取り組んでいかなければならないと感じています。